

松本県ケ丘高等学校創立百周年記念式典 学校長式辞

本日ここに、長野県松本県ケ丘高等学校創立百周年記念式典を開催いたしましたところ、ご多用中にもかかわらず、多くの皆様のご臨席を賜りました。このように盛大に式典を開催できますことは、まことに大きな喜びであり、皆さまのご理解とご支援のもとに、この日を迎えることが出来ましたことに対し、深く感謝を申し上げます。

百年前、「蚕糸王国」とも言われた信州の製糸業の繁栄と経済発展を背景に、教育への関心が高まった時代、大正12年に本校は旧制松本第二中学校として開校しました。

当時の県ケ丘一帯は、人家は稀で、人通りも少なかったといえます。「桑畑の中に西洋風の灰色の校舎がぽつんと立つ風景は、開拓地を思わせる荒涼たる気分の反面、前途への光明からくる活気があふれていた」と当時の生徒が書きつづっています。

新たにできる中学校建設の理想に燃えて、諏訪中学校の校長から、進んで赴任されたのが、初代校長の小松武平先生でありました。

先生は常々、「質実剛健であれ」と口にされましたが、壮健な身体があつてこそ学問も成果があがるとして、新設の中学校の校技となるスポーツを探しておられました。先生は、イギリス式のパブリックスクールのように、自由で紳士的な生徒を育成したいとも考えていましたので、英国に起源をもつ蹴球、すなわちサッカーを取り入れたといえます。こうした考え方は、当時としては大変斬新であり、先生が新しい時代の学校の在り方を模索し、教育への情熱を強く持っておられたということが伺えます。

また先生は、学校の将来のこと、生徒個人々の進むべき道について、「正々堂々と行け、決して弱音を吐くな」と、正しさに対し勇敢に立ち向かうことを教え、また生徒には「君らはいつも大道を闊歩せよ」と度々口にされたといえます。

身長180センチ、体重90キロと大変体格の良い先生でありましたが、生徒に落第を知らせる朝は食事ができないほどに、大きな体とは対照的に繊細な心をお持ちでした。校舎も完成し、教育も軌道に乗った矢先、美ヶ原での生徒の遭難事故により、小松先生は病を得て、昭和5年9月に54年の生涯を終えられました。

やがて日本は苦難の時代に突入します。戦時下に入ると国家の要請にこたえるべく、生徒たちは軍事教練や勤労奉仕に積極的に参加したほか、陸海空の軍関係の学校へも自ら進んで進学しています。このことは、二中生の純真な姿を如実に示している一方で、後に多くの悲劇を伴いました。中学1回から18回までの卒業生で、戦死者はわかっているだけで130名にのぼります。

終戦後は、食料増産のための動員もあり、授業が本格的に再開されたのは昭和21年に入ってからでした。

当時、新聞部が作る「松本二中タイムス」がなかなかの人気だったそうです。部員は7名ほど、

熱っぽい議論をしながら作っていたといいます。これがのちの「縣陵新聞」となるわけですが、敗戦から価値観が一変し、若者が自由闊達に自分の意見を述べることのできる新しい時代の到来を象徴するものでした。

そして昭和 23 年、学制改革による新制高校への移行を経て、松本県ケ丘高等学校が誕生します。翌 24 年には女子生徒 27 名が入学し、男女共学となりました。

戦後の歴史で忘れられないのは、昭和 48 年の学校火災です。翌日は高校入試の合格発表という 3 月 22 日、春の強い風にあおられ、火は瞬く間に燃え広がりました。創立以来の校舎の消失は、当時の県陵人の心に深い痛みを残しましたが、臨時に開かれた生徒総会では生徒たちが母校への思いを熱く語りあい、復興へのエネルギーで大きく結集したといいます。

近年では、コロナ禍においても、生徒たちはオンラインで生徒総会を開き、在宅のまま文化祭を開催するという前代未聞のチャレンジをやったのけました。困難をしなやかに乗り越えた生徒たちに、同窓生からたくさんの応援のメッセージを頂戴したのは、記憶に新しいところです。

こうして百年を振り返るにつけ、いつの時代も母校に誇りをもち、「あがた」の地で学んだことを大切に思う同窓生や教員の姿に出会います。本校の歴史と伝統は、熱意と愛情を持って生徒をご指導いただいた数多くの先生方のご尽力と、またそれによく応えた生徒たちの精進の積み重ねによって築かれたものであることを改めて感じます。

「100 ページ目。この物語は続く」。

これは生徒たちが考え、生み出した百年目の縣陵の合言葉です。

まさに私たち生徒・教職員一人ひとりがこれまでの物語を継承し、時代の変化に応じた新しい挑戦でページを刻み、百年後に何を残せるかを考えるときに来ています。

AI がいかに進化しようとも、「どのような未来を創るのか」を想像することができるのは、人間の叡智だけです。予測できない変化に主体的に向き合い、自らの可能性を最大限に発揮しながら、常に「問い」をたて、卒業してもなお自ら学び続ける「縣陵人」を育てることが、まさに本校の変わらぬ使命であり、小松武平先生のいう三大精神に通じるところであります。これからも「縣陵」という固い絆で結ばれた学友が、世代を超えて互いに助け合いながら、社会の発展に貢献することを願ってやみません。

結びに、本日ご列席の皆様には、今後とも本校への変わらぬご指導、ご鞭撻をお願い申し上げ、また皆様の益々のご健勝とご発展を祈念し、式辞といたします。

令和 5 年 9 月 30 日

松本県ケ丘高等学校長 徳永 佳代